
不良神官は悪魔を囁く

想磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良神官は悪魔を囁く

【Nコード】

N9068L

【作者名】

想磨

【あらすじ】

三人の冒険者の旅の物語

1 (前書き)

…文才が欲しい

街から少し外れた薄暗い広めの洞窟の中に人が入っていく。

「彼らは人間に危害を加える存在を排除する事を仕事にしている『女神の剣』という組織の依頼を受けたりする、いわゆる冒険者と言われる存在だ。」

「冒険者と言えば聞こえはいいが、雑草からドラゴンまで何でもつけたまわる何でも屋という認識を大抵されていて、実際に雑草抜きを頼む人もいるらしい。」

「カンテラで暗闇を照らしながら先頭に行く男が後ろの二人に話しかける。」

「アリシア、クレス、モンスターが一匹も見当たらないから戻るぞ。」

「寝ぼけてんの、アル。まだ入って十分よ。てゆうか神官は先頭を歩かないのが普通なの。さっさと先頭譲りなさい。」

アリシアがまくし立て、クレスには非難の眼差しで見られているアルは彼らの方を見ずに地面を見ながら話す。

「俺の方が強い。勘もある。帰ると言った理由は面倒なのもあるけど嫌な予感が…。」

「獣臭さを感じ顔を上げると目の前にどでかい熊の顔が立ちはだかっている。」

牙を剥き出しにしたそれは様子から察するに親善が目的ではなさそうだ。

アルの勘は当たった。

「ど、どうすんのよ、コイツ。こんな洞窟じゃクレスは使いものにならないし。」

「……!。」

アリシアはパニック状態でクレスは表情には出ていないが落ち込んでいる中、アルは顔色を変えずに毛むくじやらの顔と顔を突き合わせた状態で考える。

「よし、いい事を思いついた。」

「…逃げるって言うんじゃないでしょうね。」

「……違う。後ろに走るんだ。」

「逃げるんじゃないの!このバカッ!」

アリシアの叫びを合図に彼らと熊の追いかけっことが始まった。

ウタリスという街の大通りにいい香り放っているカフェ『ダント
ライオン』に埃まみれの三人の客が入ってきた。

洞窟の中にいた三人である。

一人はくすんだ白いローブを太もも辺りまで詰め、長ズボンに茶
色いコートを羽織っている茶髪の男。

二人の仲間からアルと呼ばれている。

手首に巻かれた銀細工は彼が神官である事を証明しているが、本
当は首にかけるのが普通だ。

後ろの二人は姉弟らしく、金髪のツインテールが特徴のアリシア
は胸当てなどの薄い板が付いた長袖ワンピースとズボン、男にして
は髪が長めのクレスは黒い帽子付きローブを身にまとっている。

「最悪だったわ。」

「いや、最高だろ。熊の皮とかで金も入って、走りまくったおかげ
でストレス発散にもなった。」

アリシアの呟きにアルがこう反応すると小さな火山が噴火した。

「どこが最高だったの！目的の山猫退治は失敗して更に変な熊に襲
われることのがどこが！お金が入ったって言うけど山猫を退治できて
たらもつと入ってたし！ってかそもそも何で私の剣を研ぎに出して
る時に依頼受けるの！そんなに走るのが好きなら今すぐ森中を討伐

依頼をこなしながら駆けずり回りなさい！」

「それじゃつまらない。」

その言葉にまたキレル姉の裾をクレスが無言で引つ張り奥の方にある丸テーブルの席に座らせる。

残りの二人も座ると店員が注文を聞きに来た。

「火酒。ランデン地方ので頼む。」

即座に注文するアルをアリシアが呆れ顔で見る。

「ここはカフェよ。お酒なんてあるわけないじゃない。」

「かしこまりました。」

「あるんだ！」

品揃え豊富なカフェである。

クレスは小さなメモをテーブルに出す。

いつもクレスはどこからともなくメモを取り出し自分の声の代わりをさせている。

そのメモはいつでもどうやって書いているかアリシアの中で世界七大ミステリーの一つになるほど謎の多い代物だ。

そしてたった今出されたメモの内容は姉であるアリシアを愕然と

させる内容だった。

『サンドフロック
砂蛙茶』

「かしこまりました。」

「あるんだ!!」

呆けていたアリシアも一気に引き戻す回答をした店員は更にありえない台詞を言った。

「モノワームもお付けいたしましょうか？」

アリシアの顔色は真っ青で引きつり、黙って聞いていたアルもげんなりする中、当のクレスは一瞬目を見開いた後、なんと顔をほころばせて頷いた。

店員と何かを共有できたらしい。

とても非常識なものには違いない。

「コーヒーとサンドイッチ。」

弟の味覚は取りあえず置いておきアリシアも注文をする。

「コーヒーはありません。ミルクならあります。」

店員がバツサリ切り捨てる。

そんな店員にアリシアが食ってかかった。

「酒とカエルとイモムシがあるのに何でコーヒーがないのよ。」

「あるにはありますが、私の分で最後です。ミルクなら余ってます。ミルクとサンドイッチですね。」

かなり問題のある発言をさも当然のように言いアリシアの注文の改ざんを図る店員。

「コーヒーとサンドイッチよ。」

そうはさせないと先ほどの注文を繰り返すアリシア。

「ミルクとサンドイッチですね」

「コーヒーよ。」

「ミルクですね。かしこまりました。」

「ちょっと待ちなさい。」

店員がごり押しをしてアリシアの言葉を見殺しにさつさと奥に戻ってしまった。

店員という名の嵐が去り、取りあえず弟の道を正すべくアリシアは説得を試みる。

「クレス、あなたが頼んだのはカエルと芋虫よ。そんなの食べなくてもパンとコーヒー……じゃなくてミルクがあるわ。」

メモがアリシアに渡される

『二つとも魔力回復の薬になる。』

その言葉に多少安堵したが、次の文にアリシアは恐怖を覚えた。

『どっちも美味しい。』

「いつの間にか味見が済んでいる!?!」

姉弟間に軽く距離が開き始めた頃店員が問題の品を持って来た。

盆の上に酒瓶とグラス、ミルクとサンドイッチとここまでなら許容範囲内だが、その横に湯に浸かった蛙とカラリと揚がってキツネ色になった芋虫が同席している。

アルが疲れた顔でクレスに頼んだ。

「頼むから虫だけは食べる時に後ろを向け。」

言われた通りに皿を抱えて後ろを向くクレスと何かを食べる軽快な音を無視して二人は口を開いた。

飲食のためでなく話すために。

「旅費が減った。『女神の剣』支部に行って適当な依頼選んで来てくれ。」

「あんただけ行かないつもり? 目離すと問題起こすから一緒にきなさい。」

パリ、パリパリパリ

「支部の横に教会があるんだぜ。面倒な。」

「教会嫌いもいい加減治さないと生きてけないわよ。教会なんて人が居れば絶対どっかに建ってるんだから。」

サクサク、サクサク。

「……………」

「……………」

サクサク、パリパリ、パリ、サクサク。

「テイクアウト頼む。」

無視が出来ないのは一般人の証だと思う二人にテイクアウト用の袋を持ってきた店員がぼつりと呟くのだった。

「意外と多いですよ。虫を食べる地域。」

2 (前書き)

模索中…

文才がない事を痛感した

「クレス、ちゃんとついて来て。」

アリシアの疲れきった声にクレスは怪しげな店に向かう自分の足を姉の方へ向ける。

彼らは新たな依頼を受けるため、『女神の剣』支部へ人や馬車の行き交う大通りを歩いていった。

こここの通りは店が多く、日用品や冒険道具といろいろ揃う。

そのため大都会ほどでもないが人ごみに飲まれて迷子になりそうだ。

特に怪しげな店や薬問屋などに誘惑されているクレスは一瞬でも目を離せば瞬く間に人込みに消え失せるだろう。

アルはというと宿で留守番をしている。

本当はアルもついて行く予定だった。

しかしその予定を変えざるを得ない事件を起こす物が彼の右手にあったのだ。

即ち、テイクアウトした酒である。

直接的な原因はまた違うものなのだが…。

事は10分前にさかのぼる。

「じゃあ部屋に行って荷物を置きましょう。」

宿のフロントで提案するアリシア。

その視線の先にはアルの酒がある。

「別に必要ないだろ。大して持ってないし。」

右手の物体を大して問題としてないアルをクレスが見つめる。

その目にはどこか呆れや見下しなどがにじんんでいるようにアルは感じた。

「あんた神官の自覚ないでしょ。前にも言ったけど、支部の隣は教会なの。信者がそりゃあいっぱい居るの。」

「まあ、教会に信者が居るのは普通だな。」

クレスの冷ややかな視線にさらされながら相づちを打つアルにアリシアがため息混じりにこう続けた。

「その信者に神官が昼間から飲んでる所を見せてみなさい。何が起るか想像もしたくないわ。だからそれ、宿に置いてって事。」

指差すアリシアを見てやっと理解したアルだが不満げに呟く。

「神官だって人間だ。昼間から酒飲んだっていいじゃないか。」

神官じゃなくてもお日様が出てる時間帯からお酒飲んじゃダメなんじゃ、と思うクレスはアルよりも常識人だ。

味覚以外は。

「信者は神官に人の理想像を求めているの。ていうか神に仕えてんだから人として出来てる人間なのは普通でしょ。」

「そんな事はない。神は信仰してもいいが神官を信仰されても困る。」

そう言った後アルは何か考えながらアリシアに尋ねた。

「そう考えてる信者ってやっぱり多いのか？」

「そうって神官が出来てる人間だって事？まあ、常識化してるから大体そう考えてるんじゃない？」

その返答にまた考え込むアル。

それを訝しげに見るアリシアの裾を何か引つ張った。

アリシアが目を向けるとクレスがいた。

アルの方を見ては姉に視線を戻して何かを知らせている。

「よし、決めた。」

姉弟間で意思の疎通が完了したと同時にアルが動き出した。

その表情は何かをしでかす時によく見るものだった。

アリシアの額に嫌な汗が流れる。

「教会に行く。酒持って。」

「ちょっと待って。話し聞いてた？」

「ああ、勿論。」

そう言い出て行くこうとするアルを必死にアリシアが抑える。

「ちょっと、ホントに、ま、待って。」

「放せ、信者に真実を見せねば。神官だって人間なんだ、酒を飲むんだという真実を。そして作るんだ。酒を昼間からでも飲める自由な世界を。これは昼間から飲めない神官達を救えという酒の神様から与えられた崇高な使命に違いない。」

「明らかに本音は酒じゃないの！クレス！あんた見てないで手伝いなさい！」

姉に怒られてなお傍観するクレスの横を通り過ぎ、目の前に立ちふさがるアリシアをもとめせずにアルがどンドン教会の方へ進む。

「フハハハ！俺は新世界の神になる！」

「違うから！作品違うから！著作権守ってよ！」

「クツクツクツ。この熱い思いは誰にも止められなムグツ…グハツ！？」

突然、誰にも止められないくらい力強く進んでいたアルが倒れた。

自分にもたれかかったアルに状況を全く掴めないアリシア。

情報を得ようと振り向いた彼女の目に映ったのはクレスと彼が持っている揚げ虫入り袋（テイクアウト時サービスで増量）。

そう、アルとアリシアの戦いを見ていたクレスは何を思ったのかテイクアウトした揚げ虫をアルに放り投げたのだ。

クレスの手を離れた虫は綺麗な弧を描いてアルの口に入りその瞬間、彼は崩れ落ちた。

微妙に痙攣しているその風景からその威力が伺える。

「…取りあえずその虫、廃棄ね。」

この時、アリシアの中でクレスの味覚は決して信じないという不文律が生まれたのだった。

そんな事があってアルはお留守番という絶対安静を強いられる。

クレスいわく、
『少し苦みが強いから倒れただけで体調に問題はないはず。』らしい。

アリシアからしてみれば苦くて倒れる時点でアウトで、捨ててと何度も言っているのだがまだその袋はクレスが持っている。

「クレス、こっち。」

六度目のクレスの迷子事件を未遂に終わらせたときやっと目的の建物が見えた。

3 (前書き)

少しずつよくなっているのだろうか

アリシアの目の前にそびえ立つ大きく豪華な建物……の隣の古ぼけた少し傾いている平屋が目的地の『女神の剣』支部だ。

ちなみに隣の存在感のある建物は教会であり、建てた人がいかに趣味が悪いかをしっかりと主張している。

アルのような神官が生まれる理由を視覚で理解出来る、そんな教会には信者が数十人いるのが開け放たれた扉からみえる。

対応する神官は微笑みを絶やさず、全てを赦すかのような口調は信者に安らぎを与える。

その光景はまさに慈悲を与えた神と人々のようだ。

そんな光景もゴテゴテに飾られた扉越しに見ると俗っぽく映るのだから面白いものである。

「アルがいなくて正解ね。多分、あの神官に酒かけるわよ。」

それを横目で見ながらアリシアが支部の錆びたドアノブを回す。

きしんだ音とともに中に入ると支部には依頼書用の掲示板と受付を含める四、五人のしかない。

サービスのサの字も知らないのがウタリス支部の特徴なのでこの状況は仕方ないが、隣と比べると多くの人が寂しさを感じるだろう。

ちなみに猛獣、魔獣が辺りにいなく、平和でのんびりしているのもここを寂れさせる原因だ。

「それじゃ、クレスは向こうのを見て。」

いくらホコリ臭くても支部には変わらないのでかなりの量の依頼書がある。

二人で手分けして依頼書を見る事にしてアリシアは右から掲示板を見ていく。

今回はここから東にある町へ行きながら出来る依頼を探さなければいけない。

つまり、東に向かいながら討伐や採集ができ、他の支部で依頼の完了を報告できる依頼だ。

ホコリ臭さに慣れた頃やっと大体の依頼書を見終わった。

「何かいい依頼はあった？」

アリシアの問いにクレスが三枚の依頼書を渡した。

一番上の依頼書の内容はこんな物だった。

『妖面樹の種の採集』

妖面樹は人の顔が木に張り付いたような魔物で、植物のクセに枝や根を素早く動かして攻撃してくる。

さらに魔法に耐性があるので必然的にアリシア一人で戦うハメになる。

「妖面樹なんて私だけじゃ無理よ。」

クレスに依頼書を返す。

その下から出てきたものにはこう書かれていた。

『ナシア鉱石の採集』

アリシアの聞いた事のない名前が乗っている。

剣などに使われる鉱石については知っているアリシアは恐らく、機械などに使われる鉱石だろうと目星が付いた。

しかし極端に情報が少ない依頼書である。

採掘場所、色や形状、その鉱石の取扱いの注意事項などは最低限ほしいが何も書かれていない。

何とも怪しげな依頼でアリシアの表情も曇る。

「わー、何か曰わくありそう。」

怪しい依頼書をつまんでクレスに渡した。

当然、最後の三枚目がアリシアの視界に入る。

『バルーダまでの護衛』

依頼書の地図によればバルーダはここから西にあるらしい。

つまり、行き先と反対方向へ行ってしまう人の護衛だ。

「あなたお姉ちゃんをバカにしてるでしょ。」

アリシアがクレスの目の前に依頼書突きつけながらクレスに詰め寄る。

しかしクレスの表情は至って真面目で、それが余計にアリシアを苛立たせた。

「何この依頼書！妖面樹とか曰わくありげの石探しとか最後なんて逆方向ってあなた何を基準に選んでるのよ！」

依頼書ではおをグリグリ攻撃するアリシアにクレスが同じようにメモを押し付ける。

押し付けられる直前に読み取ったメモの内容にアリシアの顔は更に怒りに染まった。

『美味しい食べ物近くに生息してるかどうか』

「選ぶ基準が違うから！それにあなたの美味しいは信用出来ない！まずいでしょ！間違いなく！」

また押し付けられるメモ。

『まずくない。苦いだけ。』

「ぶっ倒れる位苦けりゃ味は不味いに分類されるの！」

争点がズレた喧嘩をしながらこれならクレスも置いていけば良かったと思ったアリシアだが、また違う意味でそれを実感する事になる。

4 (前書き)

相変わらず下手です。

とある宿屋の前の人ばかり。

その中心から言い争う声が聞こえる。

とある宿とはつまりアル達が利用している宿で騒ぎの中心はやっぱりアルだ。

「だからその右手の酒を直ちに破棄しなさい！」

アルと言い争っているのは若い神官らしくひどく怒った様子でアルにくっついてかかる。

「いいですか。神官としての自覚を持ち、人の模範となるよう努力しなさい！」

「神官の自覚はあるぞ。一応。」

「あるなら悔い改めて酒を手放しなさい！」

「神官が酒飲んじやダメって法はない！」

話しの内容から察するに意識が回復したアルが教会に酒を持って行くこととした所、行く前に神官に見つかったようだ。

「アルっ！何やってんの！」

もう騒ぎの收拾がつかなくなったそんな時、やっとアリシアとクレスが帰ってきた。

「一足遅かったなって抜ける！腕抜ける！」

「依頼人が待つてるわ。早く行きましょう。」

アリシアは早足で近づくと二人の間に入りアルをこの騒ぎから引っ張り出そうとする。

しかし若い神官がそうはさせないと立ちはだかった。

勿論笑みを絶やさずに。

「ちょっとお待ちなさい。話しは終わってません。」

「すみませんが 約束 があるので通していただけませんか？神官様。」

アリシアも面倒事を避けるべく笑顔を貼り付けて、なおかつ口調も変えて、更に約束を強調してこの場の脱出を試みる。

「申し訳ありませんがこの者は神官として問題がありますので、我が教会の方で再教育しなければなりません。」

「約束事を守るのは人として当然です。神官として当然の事をするよりも約束を守る方が先決です。」

「いえ、それは違います。確かに約束は大切ですが彼は神官です。人とは優先させる事柄が少し違うのです。それに約束はあなたが行けば守られるでしょう。」

二人が笑顔で口論する横で当事者のアルは揚げ虫の恨みを晴らす為、ヘッドロックをクレスに仕掛けている。

アルからすれば教会に行くのは当初の計画だったので喜んでついに行くし、依頼人の所に行く事になっても教会の説教から逃げる手間が省けるので事がどっちに転ぼうが知った事ではないのだ。

「アル、クレスとじゃれてないで何か言ってくださらない？」

口調と表情は優しいがその見た目を打ち消す程の威圧感に 思わず後ずさりする二人。

「何か脅されてる気がするんだが…。」

「そんな、神官を脅すなんてしませんわ。」

みんなに見えない所で握り拳を作りながら言うアリシアはアルの眼には鬼神のように映った。

鬼神に後押しされアルが口を開く。

「待ち人がいるんでもう行」

「駄目です。」

後ろを見ると鬼神が睨みを利かせている。

若干、威圧感が強まっているような気がしたアルは冷や汗をかきつつまた神官と向き合った。

「まあ、後日ゆっく」

「駄目です！」

また後ろを向いてみる。

鬼神が殺気を放っていた。

アルは無言でクレスの袋から例の物を取り出すと神官の口に突っ込んだ。

「何を…！ゴフアツ…！！」

一時間前のアルのように地に倒れる神官。

「神官殿は何か持病があるようだ。我々には何もできない。さて、行くか。」

「行くかじゃないわよ！何してんの！神官倒れちゃったじゃない！」

「食物を食べたせいで倒れる訳ないだろ。」

にこやかにその場を離れるアルと抗議しつつも倒れた神官を無視して歩きだすアリシア。

それについて行くクレスは人を倒せる苦味を味わいながら思った。

（結局、面倒事はおこるんだな。）

倒れた神官を無視して向かった先は依頼人が営んでいる雑貨店。

依頼書で指定された時間はとうに過ぎていたが店の前には小太りで柔和そうな人物が待っていた。

「すみません。遅れてしまって。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。あなた方が依頼を受けて下さったのですね。」

そう言つと店主はアル達を店の奥へ案内する。

「すごいな。同じ笑顔でここまで違うとは……。」

アルが店主の笑い顔とつい先ほどまでの2つの笑顔の差に感心しつつ慌てたように先を急ぐ。

後ろにそのつい先ほどまでの笑顔があるような気がしたからだ。

「私はこの店で店主をしていました。」

少し古びた、落ち着いた雰囲気のお店に入ると室内は見事に何もなかった。

入り口に立つただけでその全ての床が見えるような状況を店主は歩きながら説明する。

「そして今回も少し大きい町に店を引っ越す事になりました。あなた方には荷物を運ぶ護衛をして欲しいのですよ。」

人の良さそうな笑みを浮かべたまま話す店主に導かれるままアル達は奥の扉をくぐった。

窓から西日が入るその室内には大の大人がやっと抱えられるくらいの木箱が七、八個置かれているだけでその箱の一つに地図が開かれていた。

「荷物はその木箱だけです。依頼書にも書いてありますけど森を越えた所にあるラウナまでお願いしたいのです。」

地図を見て難しい顔をする店主にアリシアも地図を覗きこむ。

「この森を横断して町と町を結ぶ道を使うと依頼書にも書いたのですが…。」

「何か問題が起きました？」

「先日、この道で人がワイバーンに襲われる事件がありました、封鎖はされていないのですが騎士を十人つけないと生きて通るのは無理だと言っ話です。」

少し困った笑みを浮かべ、店主はこう続けた。

「国の騎士団も女神の剣もまだ討伐に動いていないのです。だからこの森の縁を通る道を行こうかと。」

「いえ、大丈夫です。」

その返答に常時浮かべていた笑みに戸惑いをにじませる店主を見てアリシアは確認を取る。

「ワイバーン大丈夫でしょ。」

「まあそれくらいなら平気だろ。」

「じゃ、明日の朝出発だから準備しときましょ。」

事の大きさに対して会話が軽すぎる事に明日が不安になってくる店主を無視して部屋を出る三人。

「遺書でも書こうかな。」

店主の顔は笑っていたが間違いない引きつっていた。

「足りない物はない？」

少し欠けた月と町の灯りが仄かに輝く頃、男共を急かす声がある一室に響く。

アリシアが仕切るその部屋は騒ぎがあつた宿ではなくそこから離れた宿の一室。

例の厄介な神官ともう会いたくないと言ってアリシアがクレスを走らせ宿を変えさせたのだ。

「クレス、変な物はリュックに入れない事。」

返す刀でアルにも釘を刺す。

「アルはお酒は入れないでね。というか減らしなさい。」

「旅には必要だ。」

「物には限度があるの。」

アルのリュックは登山用の大きい物でそこに小さな酒樽が詰め込まれていた。

樽しか入ってないその様子はアリシアの言うように限度を越えている。

しぶしぶといった様子で中身を入れ替えつつそれでも多めに酒を入れようと必死である。

そんなアルを確認してクレスのリュックに目を移したアリシアは呆れつつまた注意を飛ばした。

「そこ、ゲテモノは持ち込み禁止。」

『体に良い。薬代わりになる。』

「薬の役目は薬が担うわ。」

アリシアがリュックをひったくり中身を次から次へと出していく。

およそ五分かけて芋虫を焼いた物から正体不明の骨までざっと三十品ほどが大して広くない部屋を埋め尽くした。

まさしく怪奇現象だ。

「一体どうやってこの量入れたか知りたいわ。」

『汗と涙と気合いと意地。』

「とにかく没収。」

酒樽とゲテモノを布で包みサンタクロースの袋となったそれを部屋の外へつまみ出す。

「横暴だー。」

『血が通ってないのかー。』

後ろで飛ぶ紙飛行機と野次にとつとつアリシアが切れた。

「仕事だって言ってるでしょー!!!!!!」

この後、月が山に隠れるまで女性の説教する声が部屋から聞こえ、朝に宿を出たある二人の顔は宿で休んだとは思えない顔だったらしい。

朝靄の中、アリシア達は門の前にいた。

三人ともが厚手のコートを羽織り、その下にはいつもの装備、それに加えて背中にリュックを背負い準備は万全だ。

しかし、早朝の冷たくも清々しい空気を室内にぶち込まれて叩き起こされたアルは昨日の説教もあつてかなり眠そうで体調面は万全どころか絶不調。

クレスもいつもの無表情に見えるがどこことなくまぶたが重そうで足元がふらつき波にゆられる海藻状態になってしまっている。

そんな被害者達を生み出した張本人は全く平気で気合い十分、波どころか大嵐が来ようとも揺らがないに違いないと思わせる程だ。

夜中の説教に加え短い睡眠でも普通に活動できるその体力は世界中の冒険者の中でもめつたに見ないものだろう。

「いい加減シャキツとしなさいよ。もうすぐ店主が来る頃だわ。」

「説教6時間に早朝出勤は無理があるから。…眠。」

「それぐらいで弱音吐くなんて軟弱ね。」

『睡眠時間<説教時間』

「いや、お前の体力と一緒にするな。普通は無理だぞ。フツーは。」

「じ、自業自得よ。」

圧倒的に不利な話題に安易に触れてしまったアリシアに救いの手を差し伸べるように遠くに馬車が見えてきた。

二頭の馬を操ってアリシア達の前に来たのは例の店主で、合流した冒険者の様子を見て相変わらず笑みを絶やさないふくよかなその顔を傾げて不思議がっている。

店主の疑問と後ろから恨みがましい視線をアリシアは全力で無視してたつた今来た新たな話題に飛びついた。

「おはようございます。」

「おはようございます、アリシアさん。どうかしましたか？」

「いえ、大丈夫です。自業自得ですので。」

明らかに大丈夫そうじゃない二人が気になる店主にアリシアがこう返し二人を急かす。

意識が夢に持って行かれてたり欠伸を連発したりする二人に店主は声をかけた。

「荷馬車の片隅で良ければ空いていますよ。」

クレス曰わく、『彼の背には後光がさしていた』らしい。

8 (前書き)

お待たせしました。

…待っていないと言われねようともお待たせしました。

ウタリスからラウナまでの道は草原と森を横断するような形で上空からみれば真っ直ぐ繋がっているのが確認できるだろう。

朝露に濡れた大草原を二つに分けるように作られた舗装されていない道は少しぬかるみ、歩き辛さを感じさせる。

土の湿った香りのするその道はアル達の荷馬車が独占していた。

つまりワイバーンが出る道を通るという無茶をする奴らは彼らだけなのだ。

通るだけでも無茶なのに心の広い店主の提案で一人は荷台で休憩し残りの二人で害獣などを警戒、という状態。

他の冒険者が見たら思わず自分の眼を疑うだろう。

「寝ながらでいいから後ろをちゃんと見ててよ。」

少し尖った口調でアリシアがクレスに声をかけた。

しかし幌馬車の片隅にいるはずのクレスからは全く返事が帰って来ない。

アリシアが何度も話しかけても反応がないので見てみると幌馬車は天蓋付きベットだと言わんばかりの眠りっぷりを彼女の弟が見せていた。

まだ十歳位の少年に睡眠は不可欠だったらしい。

仕事中にこんな状態なのは許し難いアリシアだが原因の一端は自分であるためため息しか出ない。

馬車の横で昨日を思い出し、確かにあれではいくら隣町までの道のりでも辛いだろうとまた少し暗くなる。

無論、荷物に酒やらトカゲの黒焼きやらを詰め込もうとした彼らも悪いのだが。

そう落ち込んでも状況は変わらずとにかく欠けた分は補おうとより一層警戒するアリシアにアルが話しかけた。

「あんまり張り切り切ると後で疲れて動けなくなるぞ。後ろはいいから前と上空を頼む。」

「…了解。」

普段の酒好きでだらしない様子からは想像できない発言だが、アルは冒険や探検の時には意外と頼れる存在だったりする。

正確に言つと冒険や探検の時以外は全く期待できない。

もっと言えば目を離せば最悪の状況を五分で作りかねない。

だからアリシアは日常生活でもこんな感じだと楽なのにと白い目を向けてしまうのも仕方ない事だった。

「…何だ？」

「…何も。」

しかし彼女は何も言わない。

言ってもアルは変わらないだろうと悟ってしまっているから。

「酒飲みてえ。」

「仕事中!！」

それでも注意してしまうのは彼女がこのチーム唯一の常識人ゆえの宿命なのだろう。

「そういえばアルさんは神官なのですか？」

「神に仕える身だ。」

そう言ったアルを見て感慨深げに呟いた。

「冒険する神官を久々に見ました。昔はもっといたんですがね」

「昔は冒険とか開拓で傷ついた奴らを癒やしてついでに依頼やって教会の運営費の足しにしてとネットワークが軽かったからな。」

それを反対側で聞いていたアリシアはアルのような人間が至る所に居る光景を想像してポツリと呟いた。

「昔は酒屋が大繁盛してたのね。」

「自堕落な奴ばっかりじゃねーぞ。」

「自分で自堕落って認めてるよこの人。って酒飲むな！自堕落神官！」

「自堕落で結構。」

馬車の反対側から聞こえてくる声を全く気にする事なくアルはバツクから酒を取り出す。

アルが取り出した酒はアリシアの厳しい検査をくぐり抜けたものである。

いつもアルは仕事にも酒を飲むが酔っ払って仕事に支障を来す事は何故か一度もなかった。

しかし最近だらしなすぎるアルを矯正すべくアリシアが今回アルコール度数の高い蒸留酒を没収したのだ。

なぜ蒸留酒だけかという酒を全て奪った場合、アルの精神状態は最悪になる事がわかりきっていたためである。

ちなみに蒸留酒を没収されたアルは部屋を出る間際まで隅でいじけていた。

その持ち物検査はアルだけにとどまらず、巻き込まれたクレスは激苦コーヒーを没収された。

ちなみにこちらも部屋の隅でぎりぎりまでいじけていた。

様々な物を没収したアリシアの検査をくぐり抜けたそれは蒸留していなくて一見アルコール度数が低そうだが実はかなりある代物で火がつくほどだ。

寝不足なのにそんなものをかなりのペースで飲みながら歩く。

普通の人なら五分もすれば地べたに寝ころぶだろう。

「あの森に入ったらワイバーンの心配はなさそうだな。」

眼前に広がるつつそうとした森は確かに上空の敵を防いでくれそうである。

「そういう事言ったらフラグ立つわよ。」

少し気が楽になったアリシアが冗談を言った瞬間、ある音がその冗談が冗談ではなくなった事を知らせた。

空気を力強く打ち下ろす羽ばたき。

その音とともにやってきた三体はどれも手前の森の木ほどの大きさであり、すらりとした体躯は蛇の体を思わせる。

その先に付いた頭の小さく並んだ鋭い歯のある口を大きく広げると女性の悲鳴のような鳴き声が空を切り裂いた。

9 (前書き)

長くなりました

「おお、本当に来た。」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ!!」

空を旋回する三つの巨体は二人の掛け合いには興味がないよう
息のあった旋回を保ったままゆっくりと高度を下げて獲物を狙う。

こんなにチームワークが良いのにワイバーンは集団で狩りをする
生き物ではない。

自分達よりも大型の敵に襲われた時にしか協力しないのだ。

つまり素晴らしいチームワークを発揮するという事は敵と認識さ
れている事になる。

「じゃ、アリシアはクレスを起こせ。仏さ、じゃなくて依頼主は幌
馬車の中に隠れてる。」

アルは指示を出しながらついさっきまで飲んでいた酒の中に胸ポ
ケットから取り出した粉末を入れた後、布を詰めて栓をした。

一斉に動き出した一行に触発されたのかワイバーンが旋回を止め、
急降下を始めた。

アルは降ってくる巨体を一瞥すると瓶の先の布にマッチで火を付
け、それを思いっきり投げつける。

回転しながら瓶は一体の頭に直撃した。

途端、耳が痛くなる程の轟音と共に瓶が爆発し、ガラス片と炎が爆風によって散らばった。

ワイバーンの丈夫なウロコを傷付けるまでにはいたらなかったが突然の爆音にパニックを起こしさっきまでの抜群のチームワークが一気に崩れさっている。

「あと一口飲んどけばよかったな。」

自分でやっておきながらかなり残念そうに呟くアルに爆発からいち早く立ち直った一体が低空飛行で向かってくる。

とても迫力のある光景だが迫る巨体さえもアルに焦りを与えなかった。

「後は任せた。」

アルがそう言った瞬間、そのワイバーンの頭に一本の剣が突き刺さった。

クレスを起こしていたアリシアが地を蹴り、空を舞って巨体に降り立ち、深々と剣を突き立てたのだ。

その巨体が飛んでいたスピードそのまま草原を滑ってアルの目の前で停止するとワイバーンの頭からアリシアが降りてきた。

全身血まみれのアリシアは血を拭くよりも残りのワイバーンを退治するよりも先にアルに詰め寄り説教を始めた。

「何あの酒！アルコール度数の高いのは禁止って言ったでしょ！」

「いや、だって蒸留酒じゃないし。」

「何で蒸留酒を禁止したかわからない訳ないわよね。」

「わかるようなわかりたくないような。」

血まみれで般若の形相という恐ろしい姿だが説教の内容が飲酒についてなので締まりがない。

噴火の秒読みが始まりかけたアリシアの意識を逸らすためアルは話題を変えた。

「それよりクレスは起きたのか？」

「当たり前でしょ。あの爆音で起きない訳がないわ。」

そう言って視線をクレスに向けた。

彼は荷馬車のすぐ横に立っていた。

その目は未だパニック状態のワイバーンを見据え口からは涎が出ている。

そう、口からは涎が出ている。

「なあアリシア。」

「何。」

「あいつって涎垂らして寝てたっけ。」

「いいえ。」

「…じゃあワイバーン見て涎垂らしてるんだよね？」

「…そう言う事になるわね。」

そう言うって二人はしばし黙り込んだ後二人は全力疾走した。

「間違いない！寝ぼけてる！」

「何であの騒音で完璧に目覚めないのよ！てか何でワイバーン見て涎垂らしてるの！」

「ワイバーンを蛇と間違えてんじゃないかねえか！」

「それもそれで問題よ！」

クレスに駆け寄るがその二人にまた触発されたのかワイバーンが急降下を始めた。

ワイバーンの落下速度はぐんぐんと上がり、クレスに迫る。

それを寝ぼけ眼で見つめていたクレスがうとうとしつつふらふらと手を挙げた。

「ッ！伏せる！」

アルが言うのとクレスの手の先から魔法陣が出現するのは同時だ

った。

その幾何学的な魔法陣は一瞬、自身の緑の光を強めると中心から空を焼き尽くさんばかりの炎を吐き出した。

二匹のワイバーンは急に現れた炎の海をかわそうとするが加速した落下運動には勝てず炎のうねりの中にその身を投じた。

そして数秒後、炎が出る寸前に伏せていたアルとアリシアの目の前に一体の黒こげのワイバーンが勢いよく飛んできた。

「やっぱり蛇と勘違いしてるな。」

「我が弟の嗜好改善に着手しなければいけないようね。」

アルの言う通り、それは昨夜クレスのバックから没収した蛇の黒焼きに似ていてアリシアに頭痛をもたらした。

「短時間で真っ黒って相変わらずだね。」

「どんな状態でも威力は変わらないんだな。」

「何で加減を教えなかったのよ。」

「そんなに強くなるとは思わないだろ。」

普通に会話している二人だがその頭の上では仕留め損ねたワイバーンに向けて放たれた大量の巨大な火の玉が飛び交っている。

「弟の嗜好を悩む場合でも呑気に話してる場合でもなかったわ。」

「当たり前だな。このまま森林火災なんて起きたら面倒だし。」

二人が話してる間にワイバーン対クレスの戦いはますます激しさを増していく。

実際には戦いとは言い難く、他の人が見たらあのワイバーンが可哀相に思えてきてしまうほど一方的なものだ。

火の玉は一発でも当たっただけで即死するほどの温度で小屋を丸呑みする位巨大だ。

そんなものが大量に向かってくるのだからワイバーンは逃げたくてもかわすのが精一杯。

一方のクレスはどれだけ眠たかったのかまだ夢うつつだ。

ワイバーンは死に物狂いなのにそうさせている側は半分眠っている。

自分は不幸だと言う人に見せたらきつともう一度頑張ろうと思うに違いない。

夢うつつなクレスは夢の中でしびれを切らしたのか一層、巨大な魔法陣の外枠が現れた。

今までの手に収まるような魔法陣とは違う、クレスを覆わんばかりに現れたそれに顔色を変えたのはワイバーンだけではなくアリシア達もだった。

「待て待て。あれだと森林火災は確定だぞ。」

「それよりもあの距離じゃ依頼主が幌馬車の中で蒸し焼きだわ。」

どちらも洒落にはならない大惨事に違いはなく二人は火の玉がなくなった空間を全速力で走り出した。

驚異的な速度でクレス目掛けて突進するが魔法陣は既に完成され強く発光する。

もう間に合わないとアリシアが思った瞬間、隣で走っていたアルの言葉に耳を疑った。

「その森にモノワームがいるぞ！」

「もっとマシな言葉を言いなさいよ！」

そう言った後クレスを見たアリシアは今度は目を疑った。

アリシアの眼が映し出したのはモノワームがいるという言葉に反応し、森をかき分け入っていく弟の背中だった。

自分の呼びかけがたかが虫に負けたという事実にはアリシアはその場に立ち尽くし、ポツリと呟いた。

「どこで育て方、間違えたのかなあ……。」

「哀愁感漂わせるのはワイバーン始末してからにしてくれよ。」

そのワイバーンはさっきの火の玉ですっかり戦意を失い、これ幸

いと空高く逃げ出していた。

それに気付いたアルはふと戦いの後を見回す。
姉の声より虫の存在で目を覚ましたクレスは採集に没頭し、アリ
シアは道の端で体育座りをして落ち込んでいる。

ある意味ワイバーン三体よりも厄介な事態に陥っている事にアル
は肩を落とした。

「お姉ちゃん、どうすれば良かったのかなあ。」

「…はあ。」

とりあえずこのままだと森のモノワームを取り尽くしそうなクレ
スを止めるためアルは行動を始めるのだった。

「クレス、これ隣にまわして。」

アルに慰められて復帰したアリシアが食事の準備を始めた。

ちなみに、アリシアの隣で手伝っているクレスを森から連れ戻すのに一時間かかっている。

そしてアリシアを慰めるのにもほとんど同じ時間を費やした。

つまり実はかなり予定より遅れているのだ。

それでも昼食をとる事になったのは仏様のごとく心の広い店主が大丈夫と言ってくれたからである。

この人を怒らせるのはおそらく不可能なのだろう。

アルの姿が見えないのは森からクレスを連れ戻した直後に薪拾いを言い渡され森に戻っていったためだ。

アリシアとしてはこれは一か八かの賭けだった。

クレスが森に入った場合、薪ではなく虫を拾う確率が極めて高い。

自分が行ったら間違い無くアルの口からアルコール臭がきつく漂うだろう。

店主は論外、薪無しで調理は出来なくも無いがしたくない。

アリシアはそんな考えをめぐらせた結果、眼を離すのは危ないがアルに頼む事にしたのだ。

もちろん後に馬鹿な事をしたと自らを責める羽目になるのだが…。

「本当にワイバーンの心配なんてしなくても良かったのですね。」

今まで作業を見ていた店主がアリシアに話しかけた。

もはや見慣れた笑い顔だがそこに驚きの表情が混ざってないのに気付く。

「そつえばワイバーンが来た時、そんなに慌てていませんでしたね。」

「いえ、結構びっくりしていましたよ。」

「昨日はワイバーンを倒せると聞いて半信半疑だったのになぜですか？」

「借りた馬を取りに行った時にあなた方を知る人に会いまして、その人達なら大丈夫だ、と絶賛していたのです。」

余程すごい事してきたのですね、と締めくくった店主からクレスに向き直りアリシアは尋ねた。

「私達何か有名になることした？」

『アルが冗談を真に受けて酒場の酒を飲み尽くした。』

「それで有名になっても絶賛はしないわ。」

『アルが神官に説教して神官を人間不信にした。』

「それもほめられた事じゃないわ。」

『アルが教会の中で神なんて信じるなど大声で発言した。』

「もういいわ。とにかく心当たりはないのね。」

アリシアはあの時の頭痛が再発したかのように顔をしかめ、クレスの発言用紙を破き始めた。

もう二度思い出さたくない記憶だったようで愚痴を呟きながら、かなり執拗に、とても細かく、親の仇のごとく破いていく。

千切るとい言葉の方が当てはまるようになってもまだ破く。

ついに剣まで使おうとした所で店主が話題のすり替えを実行した。

「その剣は細身なのにワイバーンのウロコを貫いたはずなのに歪み一つありませんね。」

その問いかけは彼女の行為を止めるのに有効だったようで手はすくに止まった。

「当然ですよ。この剣は職人に無理に無理を重ねて作ってもらった

んです。」

しかし今度は口が止まらなくなったようだ。

「見てください。この氷よりもなめらかな表面。そして軽さと強度の両立を追求して生まれた細くも頑丈な刀身。何より切れ味！私の理想に限りなく近いわ。」

自分の剣を見つめるその眼は心なしか潤んでいる。

まさしく剣に酔っていた。

いきなり豹変したアリシアに驚きを隠せない店主を気にも止めずにしゃべり続け、刀身の形状と抵抗について話し出した時点でクレスがブレーキをかけた。

自分の弟に裾を引っ張られ話を止められたアリシアは周りの状況をやっと確認した後、耳まで赤に染めながら水を汲みに行った。

まだ驚いている店主を無視してクレスも立ち上がり気配を消して動きだした。

今のうちに食後のコーヒーを姉から取り戻す為に。

一方、薪拾いに行っているアルは己の不運を蹴飛ばしながら突き進んでいた。

この不運は今足元に群がっている肉食ネズミを指している。

握り拳くらいの茶色いそれは二十数匹くらいいて足に飛びかかる

がはじかれ泥を跳ねているようにしか見えない。

このネズミはラスパンという名前がありもつと民家に近い所で家畜を襲って生活しているはずなのにアルの日頃の行いが悪い為か誰かの陰謀か、急に寄ってきたのだ。

「また増えてるよ。面倒な。」

肉食ネズミと呼ばれるくせに頭は犬に近いそれを見ながら悩み、ふと顔を上げたアルは表情を変えた。

それはアリシア曰わく何かよからぬ事を思い付いた時の笑みだった。

「クレス！そんな体に悪い物を飲もうとしない。」

アルがそんな笑い顔をしている事も露知らず弟の食生活の改善を決行していた。

標的になったのはつい先ほどアリシアのリュックの中から奪還した激苦コーヒーだ。

せつかく戻って来た食後の癒やしを奪われてなるものとクレスが抵抗をしている。

「そんなの食後に飲んだら胃が痙攣起こして吐くわよ。」

クレスが姉に背を向け、顔だけを覗かせる。

他の人から見たらただの無表情に見えるがアリシアはクレスの目

からしつかり情報を受け取った。

断固拒否だ。

「ワガママ言わない。クレスに悪影響が無くても両隣が危険なの。」
いくら話しても渡さないクレスにアリシアが強硬手段に出る。

クレスの背中に覆い被さり瓶を奪おうとし、クレスが全身を丸めて抵抗する。

「さっさと渡しなさい！それは飲むだけで周りの人の口にも苦味が広がって目も痛くなる劇物なのよ！」

その言葉に微笑ましく姉弟のじゃれあいを見ていた店主の笑みが固まる。

「更に言えばあんた一回それで異臭騒ぎ起こしたの忘れてない？敵国からの襲撃だと勘違いされて大変だったじゃない。」

店主の固まった笑みが引きつる。

後ろの店主の表情を気付けるわけもなくアリシアが全く渡そうとしないクレスについて折れた。

「わかったわ。体に悪いから三口まで。それと風下で飲むこと。いい？」

姉から妥協を引き出せたクレスの無表情が少し崩れた直後二人が何かに気づいた。

森の方から何か草をかき分ける音と盛大な羽音が近づいてくる。見えてきたのはアリシアにとって頭痛の種にしかならないあの笑みを浮かべて走るアルとそれを追う無数の蜂だった。

「うわっ。何あれ。」

『アル』

「違うわよ。その後ろ。」

『蜂』

「それも違うわよ。一応正しいけど。」

姉と弟の筆談交えた会話をしている内にもうアリシア達も危ない距離まで近づいていた。

「クレス！これ貰うわ！」

クレスの手から瓶を取ると剣を抜いた。

「アル！伏せて！」

アルが伏せるというよりヘッドスライディングじみた回避をする。アリシアが瓶を振りかぶり蜂の大群目掛けて投げ、目にも留まらぬ早さで鞘から剣を抜いてそれを斬った。

アリシアの流れるような動作で斬られた瓶は空中で中身を撒き散

らし蜂に激苦コーヒーが降りかかる。

途端、蜂が次から次へと落ちていき新しくできた黒く濁った水たまりへ沈んでいく。

クレスの食後の癒やしは殺虫剤として機能する事が判明した瞬間である。

「水気で動きを鈍くしてくれるだけで良かったんだけど。」

あまりの効果に思わず咳く。

そしてそんな物を飲もうとしていた事 について問い詰めようと振り向いた。

無表情だが涙目になっているクレスがそこにいた。

蜂の大群に対しての涙ではないのは明らかだ。

「ごめんねクレス。えっと新しいの買ってあげるから。」

まさか泣かれるとは考えてなかったアリシアは慌てふためいた。

「そ、そもそも何で蜂に追われてたのよ。」

そして隣で傍観しているアルに責任転嫁した。

アリシアの慌てぶりを笑いながら見ていたアルはいきなり飛んできたとばっちりに笑ったまま答える。

「ネズミがうるさかったから蜂に掃除して貰った」

つまりアルはネズミを面倒だと思い近くにあった蜂の巣を刺激しネズミをやっつけようと考えたのだ。

「蜂のほづが面倒じゃないの！」

「下を向いてちまちまやるのは趣味じゃない」

「ってか蜂がネズミを刺すとは限らないでしょ」

「巣にぶつければ確実だ」

「その地道な作業はちまちまと言わないの？」

「言わないな」

アリシアは明らかに要らない仕事を増やした事に対して怒っているがアルは気にしない。

「それよりもクレスがいじけてるぞ」

アルに指摘されたようにクレスが黒い水たまりの前で暗い空気を発生させている。

今度はクレスを慰めるのに時間を費やす事となるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068/>

不良神官は悪魔を囁く

2010年10月30日22時35分発行